

2016 年度  
フィンドレー大学春季研修報告書

循環農学類 3年 21551042

横谷 菜央

## 第1章 フィンドレー大学について

フィンドレー大学はアメリカのオハイオ州ハンコック群に属するフィンドレーという町にある大きな大学である。私はこの大学を訪れて「広い」や「大きい」の概念を覆された。学内にはたくさんの校舎のほかにも私たちが宿泊した Welcome House や Henderson という学生食堂、美術館や絵本専門店がある Mazza Museum などがあった。なかでも、AMU という学生ホールのようなところは足を運ぶと誰かと必ず会える楽しい空間であった。体育館などのスポーツ施設は私たちも利用することができて在學生との交流をより深めることができた。

次にフィンドレーの気候についてである。フィンドレーは東北地方とほぼ同緯度にあり渡航期間の気温は北海道の11月に近いという想定で渡航したが、研修は積雪と共にスタートしたためかなり寒く感じた。毎日目まぐるしく変化する天気は言葉の壁の次に大変だったと言えるかもしれない。

## 第2章 1日の流れ

平日は5時半に起床し前日に購入した朝食を食べるところから始まった。そのあとシャトルバスに10分少々乗り Western farm に向かう。そして、7時から Equestrian (馬学科) の学生と2人1組になって日替わりで牧草の給餌か配合飼料の給餌を行った。初めは一人でコミュニケーションを取ってきちんと作業をこなすことができるかとても不安であったが、みんな私の拙い英語を聞いて丁寧に教えてくれたので自信を持って話すことができるようになった。

Western farm での作業を終えたらシャトルバスで大学に戻り、10時半頃から Henderson にて昼食である。バイキング形式でメニューも豊富であったためつい食べ過ぎてしまうことが多々あった。日本語学科の生徒や他の大学から留学に来ている日本人と一緒に食事をする事もあったので私たちのテーブルは会話が絶えず賑やかだった。

昼食を終えたらシャトルバスで再び Western farm に向かい、12時半から13時半まで Pre-vet の生徒に交じりカーズ先生の講義を受ける。ここでは基本的に馬1頭を実際に先生が治療する様子を目の前で見ながら説明を聞くというスタイルであったため、理解がしやすかった。そして、13時40分からは Western farm の敷地内にある Animal Science の家畜舎に移動してまた別のクラスの講義を受ける。講義をしてくださる先生はカーズ先生であるが、今度は馬ではなくウシ、ブタ、ヒツジ、ヤギについて学ぶ。

14時40分に講義が終わるとシャトルバスで大学に戻るのだが、そのあとの活動は曜日によって異なった。子犬のしつけ教室を見学させていただいたり、ホースセラピーのボランティアに参加したりととても充実していた。

### 第3章 貴重な経験の数々について

ここでは私が体験したことについて述べるが、馬について学ぶことが今回の留学の目的の1つであったため馬のことを中心に取り上げる。

#### 1. Western farm

Western farm は研修中、最も多くの時間を過ごした場所のひとつであるとする。ここでは300頭以上ウエスタンホースが常時飼育されており、そのうちの大半がクォーターホースでサラブレッドは少なく日本であればめったにない状況であった。写真でしか見たことがないような珍しい品種がたくさんいて、私にとっては毎日馬の図鑑の中にいるようだった。

そんな彼らに給餌している餌はビタミンやミネラルが配合されたペレット状の濃厚飼料と牧草であった。これらの割合は各馬の体重や体脂肪率によって決められており、必要に応じてサプリメントを添加したり咳が出ないように牧草を濡らしたりと細やかな対応がなされていた。

Western farm の馬たちは外部のオーナーから預かっている馬、学生の所有馬、大学の所有馬などでその多くは当歳から3歳であった。学生たちはそれぞれ2、3頭を担当しており、初期調教や競技会の練習を行う。私は、彼らが毎日騎乗する姿を見て自分で馬を作っていくことの難しさと大切さを知った。

私は Western farm を訪れて驚かされたことが2つある。もちろん飼育頭数の多さにも驚かされたがそれ以上の驚きである。

まず1つ目は馬学科の学生の乗馬歴についてである。毎朝2人1組で作業をする時に必ず何歳から馬に乗っているのかを聞くようにしていたのだが、ほとんどの学生が6歳や4歳から馬に乗っていると言っていたのでとても驚かされた。また人によってはいつから乗るようになったかはつきり覚えていないという学生もいた。このことから乗馬の上達はかなりの時間を要すると確信したが、私の騎乗時間が1回50分間であったとしてもその積み重ねを大切にしていきたいと考えた。

2つ目は Western farm 内の設備についてである。Western farm は300頭以上の馬がいるためとても大きな建物であるが、それにも関わらず厩舎から馬場まですべて屋根続きで空調も完備されていた。このような設備は日本ではほぼ無いに等しいのではないだろうか。ここまで設備が万全であれば馬たちのストレスはかなり軽減されていると考える。その他にも建物内にある馬の蹄に振動を送り血流をよくする機械は手軽に使うことができとても良いと思った。今まで日本でそのような機械が設置されている施設を見たことがないので是非とも日本に普及させてほしいと思った。

## 2. カーンズ先生の講義 (Animal Science)

Western farm での講義はとても専門的なものが多くすべてが新鮮であったが、その分説明の内容も難しかったので、一緒に研修に参加した先輩方の解説にかなり助けられた。私たちは2日間連続で同じ内容の講義をそれぞれ異なるクラスと受けたため、2回目の講義でより理解を深めることができたと思う。

1、2日目は馬の角膜に傷がついているか試薬をつけて判断したり、鼻孔にある鼻涙管に細い管を通して外から生理食塩水を入れて涙として排出させることで鼻涙管の詰まりを解消する方法などを学んだりした。

また、ある時は馬が何らかの理由で肢に痛みを抱えているときにどこが痛いかわかる方法を学んだ。この方法には段階を踏んで2つあり、うち1つ目は跛行の見られる肢に一定時間体重をかけさせた後に曳き馬で軽く走らせて痛む肢を庇っている様子を見るという方法であった。私も普段、馬の肢の状態を見るときは曳き馬の様子を見るようにしているが今回教えてもらった方法はとても分かりやすかったので今後に生かしたいと考えた。2つ目は局所麻酔を用いる方法なので獣医師無しにはできないがとても良い勉強になった。これらの他にも疝痛の原因となる体内に溜まったガスの抜き方や様々な目的に合わせたバンテージ保護の仕方などを学んだ。

Western farm の敷地内にある家畜舎での講義は主にウシ、ブタ、ヤギ、ヒツジの飼養管理について学んだ。ここでは実際に自分たちで処置を行うためとても実践的であった。去勢手術に関してはほとんどの家畜で行ったが、そもそも外科的なことをしたのは初めてだったのでとても貴重な体験となった。子豚へはミネラルなどの栄養剤の注射や歯切り、断尾、耳に穴をあけて個体識別ができるようにしたり、ヒツジの爪切りをしたりと日本にいたら体験できないことがたくさんあった。



蹄に振動を与えて  
血流をよくする機械



クォーターホースのジャスローはとても乗りやすい馬だった。



Animal Science  
の講義風景

### 3. ホースセラピーのボランティア

私たちは毎週水曜日の 18 時から Challenged Champions というホースセラピーの施設に行ってボランティアとして参加した。この施設では 1 セッションは 1 時間で騎乗者は 4 人という構成で、同じ内容のものが 3 セッション行われる。騎乗者 1 人に対し、両側にサイドウォーカーが 2 人つき必要に応じて騎乗者のサポートを行いリーダーがインストラクターの指示に従って馬を曳くというホースセラピーの基本的なスタイルで安全に配慮していた。私たちが担当したのはサイドウォーカーで時々騎乗者と話しながらサポートした。1 セッションの流れについてであるが、セラピーを受けに来た騎乗者は騎乗する前に馬にブラッシングをする。その後騎乗して馬上体操というストレッチをしてから発進と停止の練習、円運動や決められたコースを回る。

私は日本で障がい者乗馬のボランティアに参加しているため、アメリカのホースセラピーと日本の障がい者乗馬やホースセラピーの違いについても述べたいと思う。

日本では多くが福祉施設や乗馬クラブが行っているのだが Challenged Champions は独立した施設でありたくさんのボランティアがいる。このことからホースセラピーはボランティア無しには成り立たないセラピーであることを改めて知った。もっと日本でボランティアをする人が増えてほしいと思った。

Challenged Champions のセッションを見て良いと思った点は、ボールや馬の模型など物を使っていたことである。セッションの間に馬の体の部位を覚える時間が何度かあるのだが模型があると騎乗者も理解しやすいと考えた。騎乗者の障がいの度合いによるが、ただ馬を動かすだけでなく物を使って運動する方がより筋力を鍛えることができ、何よりも楽しんで騎乗できる。しかし、ボールを投げるなどの動作は馬を驚かせてしまう可能性があるものでしっかりとした調教が不可欠となると考える。今後、Challenged Champions で学んだことを障がい者乗馬のボランティア活動に役立てていきたい。



セッションの様子  
安全への配慮がなされている



各馬専用のブラシセット  
が用意されている



ボランティアの名札置き場  
何よりもボランティアの多さに驚かされた

#### 4. フライデーナイト

フライデーナイトでは毎週金曜日の夜にカーズ先生や学生たちとピザパーティーをした後にネコの去勢手術や避妊手術、ウマのワクチン接種などを行う。一般家庭のネコや小動物の手術を請け負っているため毎回手術する頭数が異なり、終了する時間もいつも同じとは限らない。ある時は午前の2時過ぎに終わったこともあった。そのため眠気との戦いとなるのだが、私にとってはとても良い思い出となった。

ネコの避妊手術は去勢手術と違って開腹するため大がかりであるが知識のない私も体験することができた。とても緊張したが何とかやり通すことができてよかった。ネコの手術を終えると、その次は Western farm で馬の採血やワクチン接種を行う。これに関しても私は知識を持っていなかったが300頭以上もいる中で行ったため、夜通しやっているうちに自然とできるようになった。ちなみに私はこのフライデーナイトで馬の採血をしている間に20歳の誕生日を迎えた。20歳という節目を馬の採血をしながら迎えた人がこの世にどれくらいいるだろうか。私の人生で一番印象深い、そして最も多くの人に“Happy birthday”と言ってもらえた誕生日となった。



縫合の練習キット

実際にネコの縫合をしたが実際の感触とよく似ていた。



避妊手術の様子



カーズ先生と私



採血の様子  
数をこなして慣れてきたところ

## 第4章 感想

今回の研修は時間を余すことなくびっしりと予定が組まれていたため充実した毎日を送ることができた。第3章で取り上げたことの他に書ききれないほどたくさんの体験をすることができた。その多くは法律上二度とできないこと（手術など）がたくさんあり、普通に日本で学生生活をしていたら知ることがなかったことがほとんどであったと考える。言葉の壁はやはり高いものであったが、何度聞き返しても嫌な顔一つせずわかるまで説明してくれたり向こうから話しかけてくれたりと滞在中に出会った人たちはみんな親切で私はその優しさにとっても助けられた。それと同時に英語をもっと勉強して次にフィンドレー大学の学生が来日した時に少しでも多く会話ができるようになりたいと思った。そして、もし海外から来た人が困っていたりしたら見て見ぬふりをせず話しかけたい。



ホームステイを受け入れてくれたグレースとノーデン一家



フィンドレー大学の正門

長い歴史を感じる佇まいであった



米国最大のロータリーパーラー



学長に今治タオルをプレゼント



研修が始まる前から打ち合わせをしてくださった国際交流課の皆様、川村先生、フィンドレー大学の先生や学生の皆さんに感謝いたします。